

慶良間諸島国立公園ステップアッププログラム 2025

改定版

2023年7月

慶良間諸島国立公園満喫プロジェクト地域協議会

はじめに

2016年3月、政府により「明日の日本を支える観光ビジョン」がとりまとめられ、訪日外国人旅行者数を2020年までに4,000万人とする目標が掲げられた。

環境省は、同ビジョンを踏まえ、日本の国立公園を世界水準の「ナショナルパーク」としてのブランド化を図り、訪日外国人の国立公園利用者数を2020年時点で1,000万人にすることを目標とする「国立公園満喫プロジェクト」を開始した。

全国の34の国立公園の中から、同プロジェクトを先行的に実施する8公園が選定され、慶良間諸島国立公園もその一つとして、国立公園としての質を高め、訪日外国人を含めた来訪者のニーズに対応するための取組を集中的に実施してきたところである。

掲げられた1,000万人の目標に関しては、2019年の訪日外国人利用者の推計で667万人となっており、特に、2020年2月以降においては、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大の影響等により観光目的の入国が制限されたことの影響もあり、目標数の達成には至らなかった。

このような状況下にあるものの、2021年以降も政府全体目標については維持される方針が示され、国立公園における訪日外国人利用者についても1,000万人目標を見据え、引き続き同プロジェクトを継続することとなった。

慶良間諸島国立公園における2020年までの主な取組としては、受入環境の充実・強化として、利用拠点施設及びビューポイント施設の整備並びに多言語対応、また、良質な旅の提供を実現するためのサンゴ礁保全ルールの普及啓発及び環境協力税の導入等を進めてきたところであるが、冬期利用の促進のための陸域を活用したアクティビティの定着、デジタル化対応、公園内における旅行消費額の向上等については、なお不十分な状況となっている。

このことから、これまでの取組状況を踏まえ、今後より重点的、かつ集中的に取り組むべき内容を再整理し、2021年度から2025年度までの5年間を計画期間とする「慶良間諸島国立公園ステップアッププログラム2025」をとりまとめ、同プロジェクトを継続するものである。

改定にあたって

令和4年4月の国立公園管理運営計画作成要領の改定に伴い、ステップアッププログラムの改定が求められていることから、国立公園管理運営計画作成要領第3（1）オにある取組方策及び役割分担を追加した。

取組方策及び役割分担の追加にあたって、本国立公園の管理運営に関わる地域の各種機関や個人等と本国立公園のビジョンやステップアッププログラムの方針等について共通認識を持って取り組むことができるよう、令和4年度に地域関係団体から実務担当者等が参加するワークショップを開催し、2025年度末までの目標の設定や目標達成に向けた具体的な取組方策について意見交換・情報共有を行った成果を改定案としてとりまとめた。

目次

| | |
|----------------------------------|----|
| 1. 現状分析 | 1 |
| (1) 慶良間諸島国立公園の特徴 | 1 |
| (2) 慶良間諸島国立公園の利用状況 | 6 |
| (3) 慶良間諸島国立公園の課題 | 10 |
| 2. コンセプトと取組方針 | 12 |
| (1) コンセプト及びコンセプトの解説 | 12 |
| (2) 取組方針 | 12 |
| (3) ターゲットとする利用者層の明確化 | 13 |
| 3. 目標 | 14 |
| 4. プロジェクトの実施 | 16 |
| (1) 重点的、集中的に行う取組事項・内容 | 16 |
| (2) 2025年度までの目標の設定及び具体的取組方策と役割分担 | 20 |
| 5. 効果検証 | 25 |
| (1) 進捗管理 | 25 |
| (2) 目標に対する評価検証 | 25 |

1. 現状分析

(1) 慶良間諸島国立公園の特徴

沖縄県慶良間諸島地域は、沖縄県那覇市の西方約 40 キロメートルの地点にあって、大小 30 余りの島々と数多くの岩礁からなる島しょ群であり、自治体は渡嘉敷^{とかしきそん}村と座間味^{ざまみそん}村の 2 村である。(図 1-1)



図 1-1 慶良間諸島地域の位置 (出典：国土地理院)

渡嘉敷村は慶良間諸島のほぼ東半分を占め、主な有人島は渡嘉敷島^{とかしきじま} (1,531ha) である。渡嘉敷島の中央東側の低地に広がる渡嘉敷集落には、渡嘉敷村役場が設置されているほか、フェリーや高速船が入港する渡嘉敷港が整備されている。島の西側に位置する渡嘉志久^{とかしく}、阿波連^{あはれん}には、それぞれビーチに面して集落が広がっており、海域を中心としたアクティビティが行われている。阿波連の漁港には、座間味村が運航する「みつしま」が寄港しており、渡嘉敷村と座間味村の行き来が可能になっている。また、渡嘉敷島と沖縄本島^{かみやましま}の間に位置し、神山島、ナガンヌ島及びクエフ島^{けいせいしま}の 3 島からなる慶伊瀬島 (チービシ) はいずれも無人島であるが、民間事業者によりコテージ等が整備されており、宿泊やダイビング等のアクティビティが行われている。

慶良間諸島の西半分に位置する座間味村は、座間味島^{ざまみじま} (666ha)、阿嘉島^{あかしま} (382ha)、慶留間島^{けるまじま} (115ha) の 3 島が有人島である。座間味島の中央部に位置する座間味集落には、座間味港や座間味村役場があり、座間味村の中心地となっている。座間味島の東側に阿佐、西側に阿真の集落が点在している。阿真ビーチ及び島の南東部の自然海岸である古座間味ビーチが海域利用の中心となっている。座間味島の南約 4.7km

慶良間諸島国立公園（以下、「本公園」という。）は、上記2村の陸域のほぼ全てと、陸域の周辺7キロメートルの海域を国立公園の区域としており、そのうち海域の30メートル以浅の範囲が海域公園地区となっている（図1-3）。陸域面積は、全国の国立公園の中で最も小さいが、海域公園地区の面積は全国の国立公園全体の約18%を占め、その全域がラムサール条約（正式名称は「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」）湿地に登録されている。

本公園は、多様なサンゴを擁するサンゴ礁生態系、ザトウクジラの繁殖海域、ケラマブルーと称される透明度の高い海域が特徴となっている「海の国立公園」である。また、我が国の亜熱帯地域においては稀な多島海景観をはじめとする多様な海域景観を有し、切り立った断崖やサンゴを主体とした白い砂浜など、海から陸までの連続した多様な景観を有している。

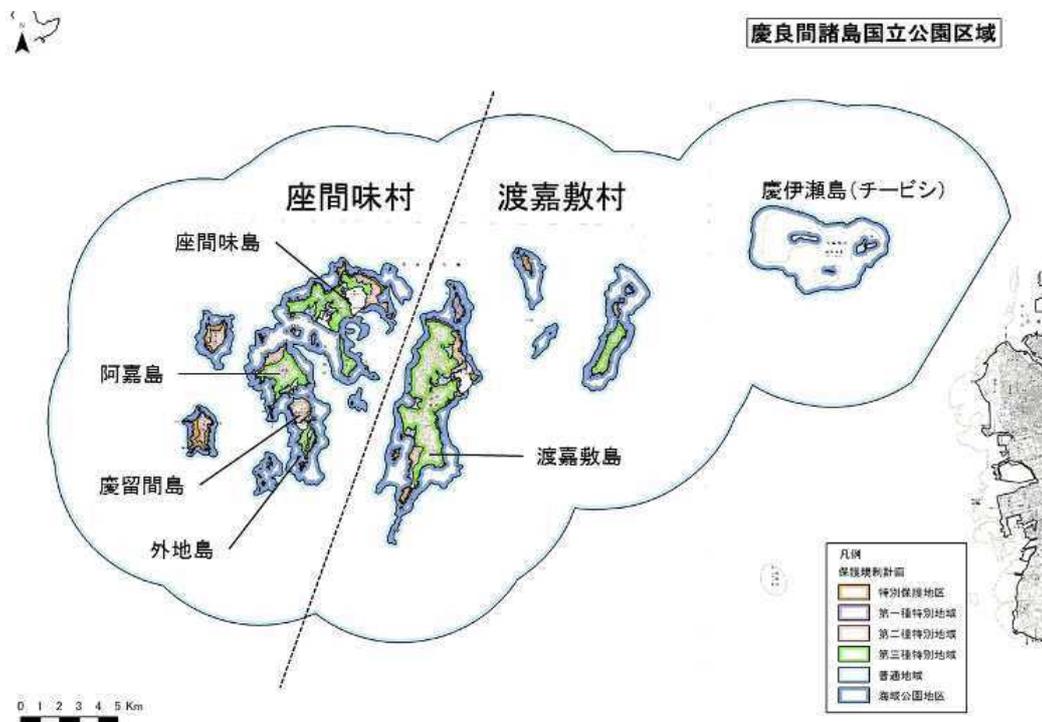


図1-3 慶良間諸島国立公園の区域



阿波連ビーチ（渡嘉敷島）



神の浜展望台（座間味島）



北浜ビーチ（阿嘉島）

本公園への入域方法には海路と空路があるが、空路は定期便がなく、ほとんどの利用者が海路によって来島する。海路の場合、沖縄県那覇市的那覇泊港から船舶を利用して各島に来島する。渡嘉敷村、座間味村はそれぞれフェリーと高速船を運航しており、那覇泊港と各村の港を行き来している（表 1-1、図 1-4）。座間味村と渡嘉敷村を結ぶ航路としては、座間味村の船舶「みつしま」が運航されている。みつしまは、座間味島-阿嘉島間を 1 日 6 便定期運航しており、そのうち 2 便については、渡嘉敷島の阿波連漁港に寄港している。（表 1-1、図 1-5）

県外、国外客のほとんどは、沖縄県に来県する際に那覇空港を利用しており、那覇空港から那覇泊港までの移動は、バスやタクシー、モノレール等での移動が主となっている。中国、台湾、韓国などアジア圏の観光客がクルーズ船で那覇港に入港したのち、泊港から慶良間諸島の各島に来島するといったパターンも見受けられる。

| 運航主体 | 船舶 (航路) | 定員 | 所要時間 | 便数 (1日あたり) |
|------|--------------------------------------|------|---------------|---------------|
| 渡嘉敷村 | フェリーとかしき 泊港⇄渡嘉敷港 | 450名 | 70分 | 1便 |
| | 高速船マリンライナーとかしき 泊港⇄渡嘉敷港 | 200名 | 35分 | 2便 (夏季3便) |
| 座間味村 | フェリーざまみ 泊港⇄座間味港⇄阿嘉漁港 | 490名 | 90~120分 | 1便 |
| | 高速船クイーンざまみ 泊港⇄座間味港⇄阿嘉漁港 | 200名 | 50~70分 | 2便 (夏季3便) |
| | みつしま 座間味港⇄阿嘉漁港 座間味港⇄阿嘉漁港⇄阿波連漁港 | 12名 | 15分 20~35分 | 6便 上記のうち2便 |

表 1-1 慶良間諸島における船舶運航

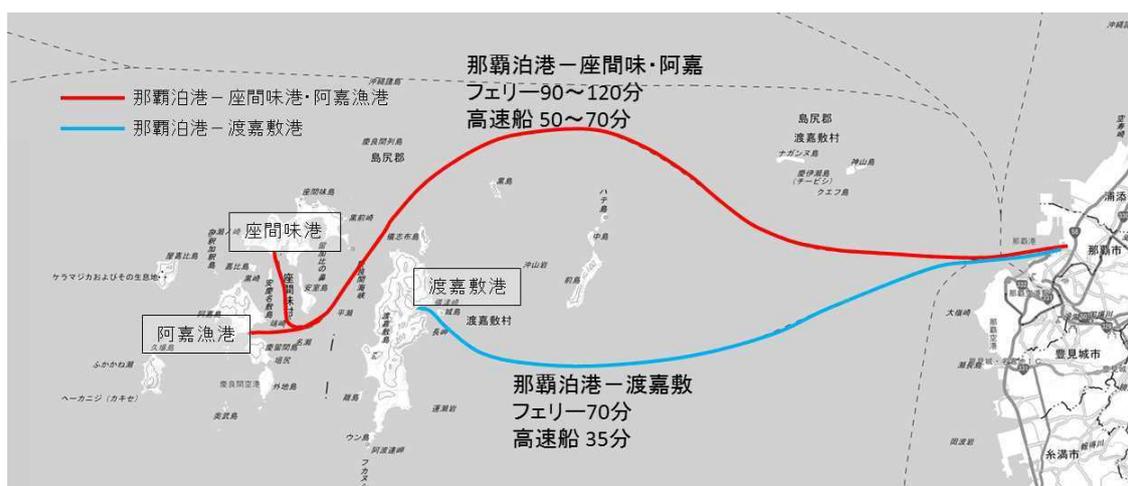


図 1-4 那覇泊港と各島の航路（出典：国土地理院）



図1-5 「みつしま」航路(出典:国土地理院)



フェリーとかしき



マリンライナーとかしき



フェリーざまみ



クイーンざまみ



みつしま

(2) 慶良間諸島国立公園の利用状況

本公園の入域者数（村ごとに集計）は、国立公園に指定された平成 25 年度以降増加傾向にあり、平成 29 年度には過去 10 年間で最大の年間約 25.2 万人（渡嘉敷村 144,167 人、座間味村 107,739 人）の利用者が訪れた（図 1－6）。夏場の利用が圧倒的に多く、令和元年度では、渡嘉敷村で年間入域者数の 47.92%に当たる 131,379 人が、座間味村で 41.91%に当たる 98,596 人が7～9月の3ヶ月間に集中して訪れている（図 1－7）。

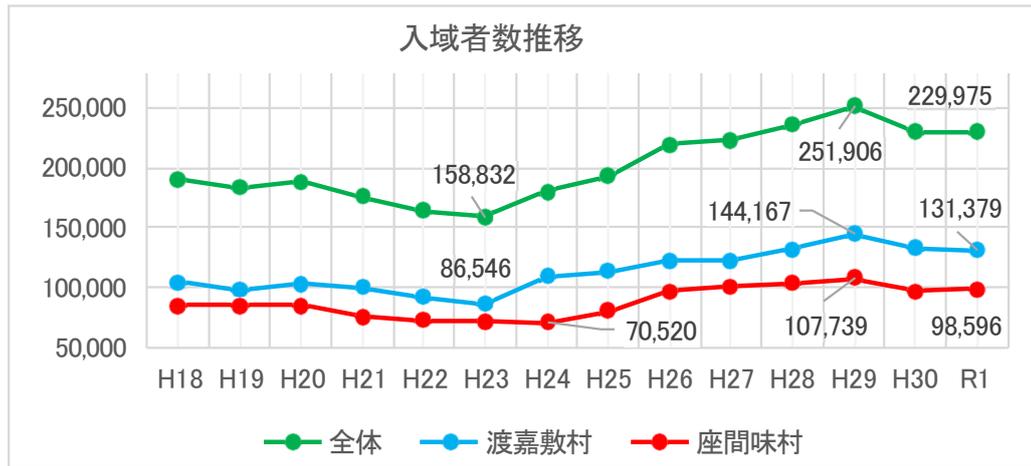


図 1－6

入域者数の推移（過去 14 年間）※渡嘉敷村は平成 24 年度に集計方法を変更

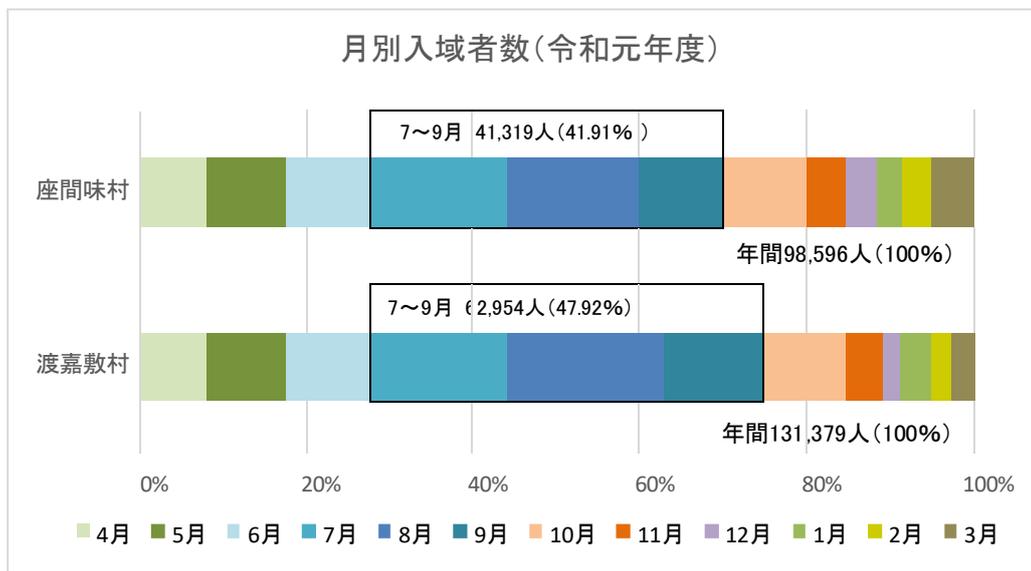


図 1－7 月別入域者数（令和元年度）

令和元年度の外国人利用者数は、渡嘉敷村で19,881人、座間味村では15,353人で、全体に占める割合はそれぞれ約15.13%及び約15.57%である。両村とも、平成27年度以前の外国人入り込み客数のデータはないが、増加傾向が続いていたものが平成29年度にピークを迎え、近年は全体で35,000人程度だった。外国人の内訳は、渡嘉敷村では約58%が中国人観光客をはじめとする東アジアからの利用者で、次いで欧州から約16%、北アメリカから約12%となっており、その他の地域からの利用者は少ない（図1-8）。座間味村では、外国人利用者のうち最も多いのが36.46%で欧州、次いで東アジアから32.84%、北アメリカが17.97%となっており、全体の約54%が欧米となっている。（図1-9）。座間味村の「座間味村」及び「古座間味ビーチ」は、フランスで発刊されている「ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン」で二つ星の評価を受けており、ヨーロッパの外国人観光客に対して訴求力が高い。

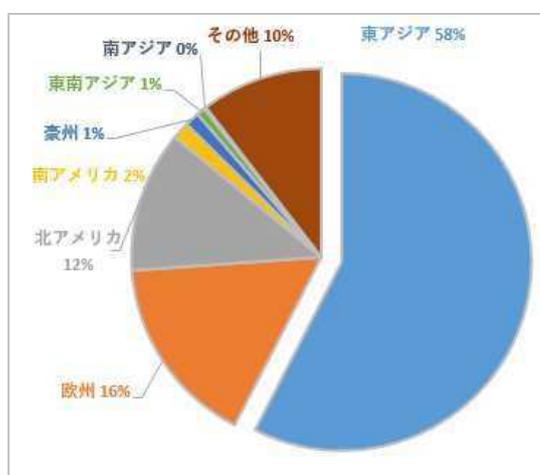


図1-8 地域別利用者数（渡嘉敷村）

渡嘉敷村統計データより

令和元年4月～令和2年3月

総数：19,881人（全入域者数の15.13%）

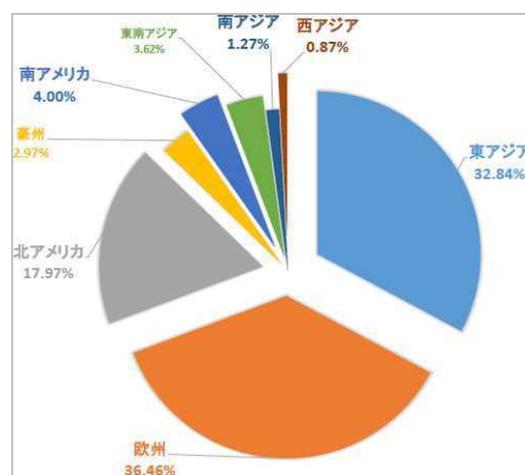


図1-9 地域別利用者数（座間味村）

座間味村統計データより

令和元年1月～12月

総数：15,857人（全入域者数の15.99%）

利用形態は各島によってそこまで大きな違いはなく、スキューバダイビング（以下、ダイビングという。）、シュノーケリング、シーカヤック、グラスボート、海水浴、釣りなど、海域を活動の場とするものが多く、それぞれのアクティビティを提供するショップやガイドも多い。そのほかの海域利用の例としては、失われつつある帆船技術を継承するための取組として、平成2年より毎年、座間味村の古座間味ビーチから那覇泊港までの間を、伝統的な漁船である「サバニ」によって航行する「サバニ帆船レース」が実施されている。冬期には、ザトウクジラが繁殖のために慶良間諸島の周辺海域に訪れるため、両村ではホエールウォッチングが盛んに行われており、船からクジラの噴気や尾びれなどを観察することができる。座間味村ホエールウォッチング協会では、ザトウクジラの繁殖を保護することを目的に、独自にホエールウォッチングのための自主ルールを策定している。

陸域では、各島に展望台や歩道、園地が整備されており、多島海景観や透明度の高い優れた海域景観を眺望できる。各島の特徴として、渡嘉敷島では、島内の風光明媚な自然景観を楽しむことができる「とかしきマラソン」を毎年2月に実施しており、県内外から多くの参加者が訪れる。また、沖縄県民交流促進事業の「島あっちい事業」を活用したまちまーい（集落散策）やネイチャーウォーキング、観光体験農業などの取り組みが進みつつある。座間味島や阿嘉島では、地元ガイドと島内を巡るノルディックウォーキングを推奨しており、利用者の体力に応じた初級から上級までの4コースを設定している。コースを歩きながら、道中の自然景観や座間味村の歴史や文化について解説する陸域ガイドの取組も始まりつつあり、新たに整備された「神の浜展望台」、令和3年度に供用開始予定のビジターセンター、座間味島「青のゆるる館」、村が建設した「座間味村歴史文化・健康づくりセンター」内にある映像を活用したシアタードーム等、利用拠点を活用した周遊も今後期待される。

外国人の利用形態としては、東アジアの観光客は日帰り利用が多く、欧米系の利用者は中長期滞在しビーチでの海水浴や日光浴、島内の散歩などを楽しむことが多く、スキューバダイビングなどのガイドを伴うアクティビティは比較的少ない。



スキューバダイビング



シュノーケリング



スタンドアップパドルボード (SUP)



シーカヤック



ホエールウォッチング



ノルディックウォーキング

(3) 慶良間諸島国立公園の課題

公園の利用状況及び2016年～2020年におけるプロジェクトの取組結果を踏まえ、本公園が有する課題について、1) 情報発信強化、デジタル化、2) 受入環境整備、3) 受入体制の充実、4) コンテンツ磨き上げ、体験メニューの多様化、5) 持続可能な利用の実現、6) その他、の6つに分類した。

1) 情報発信強化、デジタル化

- ・旅行前、旅行中、旅行後それぞれにおける、国立公園として周知すべき基礎情報やルール・マナー、来訪者が必要とする利用拠点情報や交通情報、滞在情報等のきめ細かな情報提供。
- ・日帰り利用から滞在利用・リピーター化への情報発信イメージの転換。
- ・両村に蓄積している船舶データの有効活用した利用動向やターゲット設定等の分析。
- ・各関係機関、団体のホームページの最新かつ正確なオンライン情報の整備、Wi-Fi 環境の充実。
- ・船舶、宿泊施設、アクティビティ事業者等のウェブ予約システムの対応強化。
- ・島内でのキャッシュレス化の推進。

2) 受入環境整備

- ・利用拠点地区及び展望台やビーチ等における利用施設の質的向上や活用。
- ・島内のサイン類等の多言語対応の充実、強化。
- ・公共交通の充実を含めたニーズに応じた島内移動手段の確保。
- ・利用拠点となる地区及び展望台やビーチ等における景観・展望障害物の整理、撤去。

3) 受入体制の充実

- ・青のゆく館における地域主体の管理運営体制の構築。
- ・両村の観光協会の自走化に向けた計画的な取組。
- ・ガイド事業者等の国立公園に関する知識・サービス・技能の向上。
- ・より質の高い宿泊サービス提供に向けての支援策の検討。
- ・新しい生活様式を取り入れた感染症拡大防止の取り組み。
- ・慶良間諸島国立公園一体としての観光施策の推進。

4) コンテンツ磨き上げ、体験メニューの多様化

- ・持続可能、かつ上質な自然体験プログラムの提供。
- ・既存コンテンツの魅力の深掘り、磨き上げ。

- ・季節、時間、フィールド、対象者などを多様化させた新たなコンテンツの提供。

5) 持続可能な利用の実現

- ・サンゴ礁等の保全のためのルール・マナーの一層の普及啓発、自主ルール設定。
- ・無人島の利用ルールの検討。
- ・年間を通じた利用ピークの分散化、平準化。
- ・環境に配慮した商品やサービスの提供。

6) その他

- ・島の食材を使った料理や魅力的なお土産の開発。

2. コンセプトと取組方針

現状と課題を踏まえ、本公園が世界水準のナショナルパークを目指すためのコンセプトと取組の方針を次のとおり設定する。

(1) コンセプト及びコンセプトの解説

本公園において、ステップアッププログラムを実施していく上での基本的な考え方として、次のとおりコンセプトを設定する。

ちゅ うみ け ら ま
「美ら海慶良間 リトリート・海と島がつくるケラマブルーの世界」

KERAMA BLUE : Visit our beautiful island getaway and discover Okinawa's best-kept secret.

慶良間諸島においては、一度に受入れられる利用者数に限りがあることから、大きな敷地に多様な付帯施設を擁し、多くの観光客を受け入れる従来型の「リゾート」の対極として、小規模ながら利用者一人ひとりの満足度を向上させることを目的としている。

本地域では、日常生活からリトリートし、ケラマブルーの海や島がおりなす美しい景観の中で、ゆっくりとした時間を過ごすこと、暖かみのある集落で人と人との交流を深めること、非日常的な空間で自然体験をすることなどを通して、利用者一人ひとりが満足し、満喫し、活力を持ってそれぞれの生活に戻ることができるよう、そしてまた、疲れた時には戻って来ることができる第二のわが家となるよう、各種の取組を推進していく。

※リトリート (Retreat) とは、日常生活から離れ、自分だけの時間や人間関係に浸ること
で、自分を見つめ直すこと。また、少しだけ日常を離れて自分へのご褒美にゆっくりと
過ごすこと。隠れ家。

(2) 取組方針

コンセプトを踏まえ、本公園の魅力を最大限に引き出しながら、「ケラマブルーの世界」をゆっくりと満喫できる良質な旅の提供、持続可能なツーリズムへの質の転換、地域全体の経済活性化を目指す。

1) 良質な旅の提供

世界水準の「ナショナルパーク」を目指し、「ケラマブルーの世界」を満喫できる持続可能なツーリズムを実現する。

2) リトリート空間の充実

ビーチや展望台等のビューポイントにおいて、安全かつ快適な利用環境を保持し、慶良間らしいゆっくりとした非日常的な時間を過ごせる空間づくりに磨きをかける。

3) サンゴ礁の保全

慶良間が誇るサンゴ礁を中心とした貴重な自然環境を将来にわたり守っていくため、来訪者の理解や共感を元とした地域全体で守るモデル的な地域づくりを進める。

4) 冬期利用の推進

冬期利用を推進するため、ホエールウォッチングツアーを基軸としながら陸域を活用したエリアごとの体験プログラムの磨き上げと浸透化を図る。

5) 旅行消費額の向上

受入環境の質を高め受入体制の充実を図ることにより、宿泊利用等を推進し利用者一人あたりの旅行消費額を向上させ、地域経済の活性化を図る。

(3) ターゲットとする利用者層の明確化

慶良間諸島国立公園を「リトリート」な国立公園とするためには、利用者に対して必要なサービスが提供されることと併せて、利用者の過ごし方についても、今後積極的に提案していく必要がある。

「リトリート」な過ごし方の例としては、①長期滞在することにより慶良間諸島の魅力を十分に体感すること、②繰り返し訪れることにより季節ごとの魅力など慶良間諸島の様々な面を知ること、③非日常の空間でゆっくりとした時間を過ごすこと、などで挙げられる。

本プロジェクトにおいては、上記を踏まえ、次の利用者をターゲットとする。

- ① 中長期滞在者（国内旅行者を含む）
- ② リピーター（国内旅行者を含む）
- ③ 海外旅行者については、主に欧米系外国人

3. 目標

本プロジェクトにおいては、次の3項目を目標としながら、新型コロナウイルス感染症による影響を受ける前の水準まで来訪者数が回復することを目指し、これらの目標実現に向けた総合的な取組を展開することとする。

なお、各目標については、慶良間諸島の自然環境の保全と持続可能な観光資源の活用の観点から、今後も必要に応じて見直し又は目標数値の具体化を検討するものとする。

(1) 宿泊率の向上

近年、日帰り観光客数が増加傾向であり、公園内での宿泊率は低下している。日帰り利用では那覇からの昼食の持ち込みや、公共バスの利用によるビーチのみの利用が想定され、公園内での消費行動は必要最低限となり、地域での消費額は近年減少傾向にあると推測される。そのため、まずは宿泊施設が飽和状態である夏季を除いたシーズンにおいて宿泊や宿泊に伴うアクティビティ等の情報発信などを推進し、日帰り利用から宿泊利用への利用者層の転換を図り、公園内の宿泊や各種アクティビティ、飲食等のサービスの利用機会を創出し、消費を発生させることが重要である。

このことから、各取組を総合的に実施することにより、両村とも2019年時点の宿泊率から5%以上の向上を目指す。

(2) 一人あたり消費額の増加

日帰り観光客数の増加に伴って公園内での消費額は減少傾向にある一方で、夏季利用の集中による自然環境への影響、民間事業者のサービス提供の限界などもあり、単純な入域者数増加による消費機会の創出は望ましいとはいえない。入域者数を増加させることなく消費額を増加させる方策としては、「(1) 宿泊率の向上」に加えて公園内の有料サービス利用等に関する情報発信の強化や日帰り観光客のガイド付きアクティビティの利用、購買意欲を高めるようなお土産の販売等、サービスの高付加価値化が必要である。

特に「飲食費」と「買い物費」については、ニーズが存在するものの満足度が低い傾向が見られることから、2021年に新たにオープンする青のゆるる館を中心とした飲食・物販商品の拡充、慶良間諸島の地場産品を活用した地域らしいお土産等の開発と

販売の推進、プロモーションによる既存商品の認知向上など、各施策を実施することによって消費機会を創出し、平均消費額を増加させることを目指す。

(3) 満足度向上

リピーターを獲得するためには、滞在を通じた満足度を高めることが重要であるが、適切に保全された自然環境、宿泊施設、食事、お土産、アクティビティ、交通、利用拠点における情報提供など、利用者の満足度を左右する項目は多岐にわたる。個々の項目の満足度を高めるためには、利用者ニーズに応じたきめ細かな情報発信、サービスの質の向上、新たな商品サービスの開発、地域関係者への支援等、各取組を並行して実施することが求められる。特に、お土産(買い物費)の満足度については、先行 8 公園の下位 1/3 に含まれ、8 公園平均に対して下回っていることから、優先的な改善対応が必要である。

このことから、各取組を実施することにより、2019年時点でのお土産の満足度評価平均である 5.19 (外国人)、4.95 (日本人) を 2019年時点の8公園平均値である5.51 (外国人)、5.10 (日本人) 以上にすることを目指し、他項目の満足度についても現状以上を維持する。

適切な目標設定のためには、船舶予約のデータ分析を継続して実施することが重要である。公園利用者の滞在傾向や属性を把握し、特に新型コロナウイルスの影響が想定される直近2年程度は国内向けを強化し、属性ニーズに応じた施策やプロモーションを展開していくことが期待される。

4. プロジェクトの実施

(1) 重点的、集中的に行う取組事項・内容

1) 情報発信強化、デジタル化

- ①本公園の価値や魅力、アクセス情報、イベント、島内交通等について、多言語によるきめ細かな情報提供を行う。
 - ・旅行前に必要とされるアクセス、国立公園の魅力、イベント情報、島内移動手段、宿泊サービス、島内のルール・マナー等の滞在イメージ全体に関して村や観光協会等のホームページを中心として体系的な情報提供を行う。
 - ・旅行中に必要とされる現地情報の入手が可能なツアーデスクの場所、アクティビティやレンタル店舗等の営業情報、各場所でのルール・マナー等に関する情報について一元的な情報提供を行う。
 - ・旅行後において再度来訪したくなるようなリピート獲得のための施策を促進する。
- ②沖縄全体における誘客のためのプロモーションやイベント等の施策及び事業と連携し、本公園の価値や魅力について効果的な情報発信を行う。
- ③宿泊、アクティビティ等のウェブ予約システムの対応を強化する。
 - ・宿泊、アクティビティ等の予約に関する時間的制約を解消し、事業者の負担軽減及び利用者の利便性向上を図るため、ウェブ予約システムの対応を促進する。
- ④島内におけるキャッシュレス化を一層推進し、クレジットカードや電子マネーが利用できる環境を整える。
- ⑤船舶のウェブ予約利用を推進し、予約データの蓄積、分析等を行い、各施策へ活かす。

2) 受入環境整備

- ①利用拠点となる地区及び展望台やビーチ等における老朽化した利用施設の再整備を検討する。
 - ・渡嘉敷村の主な利用拠点となっている阿波連地区において、既存施設に替わる新たな利用施設の整備を検討する。
 - ・古座間味における老朽化した既存施設について、トイレのユニバーサルデザイン化を行うなど、快適性や安全性確保のための整備を検討する。
- ②サイン類をはじめとした多言語対応媒体の一層の充実化を図るとともに、Wi-Fi 環境の整備、ユニバーサル化を促進する。
 - ・展望台及びビーチ等を中心に Wi-fi 環境、ユニバーサルデザイン化したトイレ、IT を用いた多言語に対応したサイン類等の整備を行う。
- ③利用拠点となる地区及び展望台やビーチ等において、展望等の妨げとなっている施設や障害物の整理・撤去を行い、景観改善を図る。
 - ・展望所及び歩道の周囲における樹木及び草本植生等について、適切な維持管理を実施し、上質な利用環境を維持する。

3) 受入体制の充実

- ①観光関連事業者の技術向上や人材育成を図るため、観光協会や商工会など地域の関係団体も含めた地域一体的な支援を進める。
 - ・定期的な自然観察会の実施を継続する。
 - ・国立公園内における観光関連事業者による国立公園制度への理解促進や利用者へ対する環境配慮に関する自発的な普及啓発が可能となるよう、また、より上質なガイドサービス等の提供が実現できるよう、ガイドの育成やスキルアップのための人材育成研修を実施する。
- ②青のゆくる館において民間活用による収益事業を核とした地域主体の管理運営を実施し、サービス体制を充実する。
 - ・青のゆくる館において総合的な観光案内を行うツアーデスクを設置し、本公園におけるツアーや各アクティビティの手配が一元的にできるようにするとともに、カフェによる飲食物の提供、国立公園の利用に必要な物品の販売を実施する。
 - ・青のゆくる館の管理運営に関して、地域関係者が連携・協力するための協議会体制を構築する。
- ③島内における各利用拠点間の移動方法についての周知を行うとともに移動手段の拡充について検討する。
- ④消費額増加を実現する方策の一つとして、島内の宿泊施設における高付加価値化を推進し、より質の高い宿泊サービス提供に向けての支援策について検討する。
- ⑤新型コロナウイルス感染症の拡大による影響を受け注目されるワーケーション等、従来の旅行形態と異なった本公園の利用可能性について検討する。

4) コンテンツの磨き上げ、体験メニューの多様化

- ①滞在日数の増加や消費額向上につながるアクティビティの改善や充実を図り、陸域の活用、冬季や夜間限定のコンテンツの開発、展望施設等の利用施設の有効活用を進める。
 - ・陸域を中心に、活用の可能性が見込まれるフィールドにおける魅力の掘り起こしや関係者で活用のためのルールづくりを行う。
 - ・渡嘉敷島の裏ヶ丘展望台等のこれまで十分な活用が行われていないフィールドを発掘し、新たな利用形態の提案を行う。
- ②各フィールドをつなげた周遊ルートづくりによるツアー造成など、新たなプログラムの開発を進める。
 - ・渡嘉敷村における国立沖縄青少年交流の家や歴史文化資料館、座間味村における歴史文化・健康づくりセンター、各村キャンプ場等と連携し、自然、歴史、文化を相互に交えた国立公園に関する情報発信や新たな受入プログラムの導入を検討する。

5) 持続可能な利用の実現

- ①サンゴ礁保全のための遊泳区域、自主ルール等の設定、普及啓発を促進するとともに、利用者にサンゴ礁の保全につながる自然体験プログラムを提供する。
 - ・さんごゆんたく館において、サンゴ礁保全のための情報発信、保全活動の拠点機能の

強化を行う。

- ・移動中の船舶などにおいて、サンゴ礁の保全に関する普及啓発を継続する。
 - ・島のルールを整理したルールブックの更新を行う。
- ②ビーチクリーンなど、美化清掃の自主的な取組を継続する。
- ・ビーチクリーンや環境整備など、美化清掃の自主的な取り組みを継続し、環境協力税等を活用した保全の仕組みづくりや利用者の理解促進、参加型体験の検討を進める。
- ③地域ごとに無人島利用ルールを検討する。
- ・周辺無人島における利用実態及び自然環境の状況を把握し、地域関係者による自主ルールの作成について検討する。
- ④年間における利用ピークの分散化、平準化
- ・夏季への利用集中による環境負荷や事業者の疲弊が懸念されることから、夏季前後への利用推進や冬季・陸域の魅力発信による分散化・平準化を検討する。
- ⑤「持続可能な観光」の推進
- ・「持続可能な開発目標（SDGs）」における関連目標の達成に寄与することを各主体が意識し、各利用施設が提供する商品やサービス等において、省エネ、脱炭素、脱プラスチックなど、地産地消等の推進を意識し、持続可能な環境に配慮した受入環境づくりを進める。海を特長とする国立公園として、観光客・地域住民に対し、海洋環境保全についての普及啓発を行う。

6) その他

①魅力的なお土産の企画、開発

- ・各島の産物を利用したお土産や特産品、国立公園や各村らしいデザインの採用など企画し、国立公園利用者の属性に合わせた商品の開発を検討・推進する。
- ・各村の産物を活用したお土産や特産品、食の開発を推進する。

(2) 2025年度までの目標の設定及び具体的取組方策と役割分担

ステップアッププログラム2025(2021.3)では、前項において、プロジェクトの実施にあたり慶良間諸島国立公園で重点的、集中的に行う取組事項及び取組内容を整理した。

ステップアッププログラム2025の改定にあたり、これらの重点的、集中的に行う取組について、地域関係者が参加するワークショップを開催し、それぞれの立場から2025年度までに実現したい目標、及び目標実現に向けて2023年度からの3か年で段階的に取り組むことをイメージした具体的な取組方策を検討した。

表4-1 環境省等の取組方策と役割分担

| 取組内容 | 2025年度末までの目標 (ゴール) | 2025年度までの具体的な取組方策 | 役割分担 |
|----------------|--------------------------|--|----------------|
| ステップアッププログラム全般 | ステップアッププログラム（主にソフト事業）の推進 | ・各年度各村3回ずつのワークショップ開催による、各団体の目標達成のための取組サポート | 環境省 |
| | | ・環境省・観光庁事業に関する地域の事業者の主体的な取組を支援する ・意欲のある事業者からの相談等に随時対応する | 環境省 沖縄総合事務局 |

表4-2 渡嘉敷村の取組方策と役割分担

| 取組内容 | 2025年度末までの目標 (ゴール) | 2025年度までの具体的な取組方策 | 役割分担 |
|-----------------------|-----------------------|--|---------------|
| 受入環境整備 | ビジターセンターの整備に向けた検討 | ・渡嘉敷村内におけるビジターセンターの整備について、村内での考え方をまとめる ・整備の方向性等が見えてきた段階で、環境省との協議を進める | 渡嘉敷村 観光産業課 |
| | 青少年旅行村のさらなる活用・整備 | ・法令等現状の確認 ・指定管理者との調整 ・新たな活用方法の検討 ・区内での旅行村の有効活用 | 渡嘉敷村 観光産業課 |
| | 部落内や道路の景観整備 | ・伐採メンバーの確保 ・部落内の整備 ・区から阿波連への道路わきの景観整備 | 渡嘉敷区 |
| | 阿波連ビーチ入口付近の景観整備 | ・賃貸契約形態の改善に向けた検討 ・区民へ意見の聞き取り ・展望施設、多目的ホール（団体旅行も受け入れ可能）等の整備 | 渡嘉敷村 観光協会 |
| | 阿波連ビーチの駐車場整備 | ・役場、環境省、林野庁に相談 ・整備場所を決定 ・駐車場整備着工（ニシバマテラスのような休憩所を作りたい） | 阿波連区 |
| 受入体制の充実 | 資料館の入客数の増 | ・展示品に関して、県立博物館職員に分野別の詳細調査を依頼 ・資料館でのイベント開催（村民無料等） ・交流の家との連携したプログラム | 渡嘉敷村 教育委員会 |
| コンテンツの磨き上げ・体験メニューの多様化 | 3島連携の付加価値の高いツアーの造成 | ・モニター事業の自走化（2本） ・新規プランの造成（6本） ・自走プログラム12本以上 | 渡嘉敷村 観光協会 |
| | ガイド必須のツアーづくりと人材育成 | ・アクティビティの洗い出し、プログラム造成計画、ガイドトレーニング計画 ・新規プログラムモニターツアー等開始、ブラッシュアップ ・モニターしたツアーの自走化 | 渡嘉敷村 観光協会 |

| 取組内容 | 2025年度末までの目標 (ゴール) | 2025年度までの具体的な取組方策 | 役割分担 |
|------------|-------------------------|---|------------------------|
| | 本島高校生を対象とした探究活動プログラムの確立 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 渡嘉敷島内受入体制の協力依頼 ・ 学習内容の明確化 ・ 協力者の拡充⇒プログラムの多様化 | 国立沖縄青少年交流の家 |
| | 漁業体験メニューの充実（養殖体験） | <ul style="list-style-type: none"> ・ 試験養殖場の新設→村内の子どもたちへ体験メニューを試行 ・ 誘客の体制づくり、体験メニューの磨き上げ ・ 養殖場での本格稼働 | 渡嘉敷漁業協同組合 |
| | 島からの平和発信 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 島の語り部の方との勉強会の内容を決める ・ プログラム作成 | 渡嘉敷村教育委員会 |
| 持続可能な利用の実現 | 海域の利用ルールの策定 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 団体全体で利用ルールをまとめる ・ 本島ダイビング業者との話し合い ・ 本島事業者への周知 | 渡嘉敷ダイビング協会 ＋ 環境省 |
| | 無人島や周辺の入域ルールの検討 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 入域ルールを周りの業者間で注意し合う ・ 無人島に上陸可能な人数を決める ・ ワンランク上の無人島ツアーの提供等 | 渡嘉敷村観光協会 ＋ 環境省 |
| | 遊漁者の利用ルールの作成、密猟者対策 | <ul style="list-style-type: none"> ・ パトロールを実施して現況を把握 ・ 現況を踏まえて対応方針を検討 ・ ルール作り ・ 体制構築 | 渡嘉敷漁業協同組合 |
| | 海のルールづくり支援 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 観光振興計画策定の過程での意見の聴取、取りまとめ ・ ルール作成支援・周知 | 渡嘉敷村観光産業課 ＋ 環境省 |
| その他 | 特産品ショップの立ち上げ 商品開発 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 予算の確保、事業者や特産品の掘り起こし ・ 渡嘉敷ブランドの構築 ・ アンテナショップ立ち上げ（2024 後半から 2025 で） | 渡嘉敷村商工会 |
| | 座間味・渡嘉敷合同イベントの開催 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 座間味や渡嘉敷の関係者などと意見交換 ・ 実行委員会を立ち上げ企画、ツアー会社と連携 | 渡嘉敷村商工会 |

表 4-3 座間味村の取組方策と役割分担

| 取組内容 | 2025年度末までの目標 (ゴール) | 2025年度までの取組方策 | 役割分担 |
|--------------|------------------------|--|------------------|
| 情報発信強化・デジタル化 | ホエールウォッチング配船システムのデジタル化 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 方法や費用について専門業者に相談、島内の他団体が導入しているシステムを参考にする ・ デジタル化に向けて具体的なシステム、課題（費用面等）の確認等、具体的な検討に着手し、システム構築に向けて取り組む | 座間味村ホエールウォッチング協会 |

| 取組内容 | 2025年度末までの目標 (ゴール) | 2025年度までの取組方策 | 役割分担 |
|-----------------------|-----------------------------------|--|--------------------------------------|
| 受け入れ環境の整備 | 探鯨員等の人材確保 | <ul style="list-style-type: none"> 課題解決のための今いる人材、島内での人材育成、スタッフ勉強会を開催、継続 まずは島内でクジラ好きの人材を確保・育成する | 座間味村ホエールウォッチング協会 |
| 受入体制の充実 | ビーガンメニューの提供 | <ul style="list-style-type: none"> 自主商品の確認、観光協会内で調理可能な商品の開発 | 座間味村観光協会 |
| | 冬場の入域者数増 (4,000人増 1,000人/月) | <ul style="list-style-type: none"> PR用映像素材を活用したプロモーションの実施 冬季の観光ツアー、新たな観光コンテンツ、パッケージツアー等開発 冬季の船舶運賃低減(R4は実証実験実施)の継続 | 座間味村船舶観光課 + 座間味村観光協会 |
| | 宿泊者数の増 消費単価をUP | <ul style="list-style-type: none"> 村内イベントの通常開催 空空情報の共有 空き家等の活用 店と宿との連携、ニーズに合わせたマッチング コーディネーターの確立 | 座間味村船舶観光課 + 座間味村観光協会、商工会 |
| コンテンツの磨き上げ・体験メニューの多様化 | 座間味ホエールウォッチングのブランド化 | <ul style="list-style-type: none"> 「クジラにやさしいウォッチング」のPR 質の高いツアーのPR(本島との差別化) 「クジラが安心して子育てできる繁殖海域」を一緒に守ってくれるクジラファン(リピーター)を増やす | 座間味村ホエールウォッチング協会 |
| | 星空保護区へ加入 | <ul style="list-style-type: none"> プラネタリウムの活用や星空観察プログラムについて役場と相談 ダークスカイ協会加入に向けた作業、 夜間の街灯や自動販売機の照明等の工夫 住民への周知 | 座間味村観光協会 + 座間味村船舶観光課 |
| | 雨天時の体験メニュー提供、宿泊客の増加 | <ul style="list-style-type: none"> 体験型ワークショップを行っている事業者の情報をまとめて発信 海の体験以外に簡単なワークショップができる事業者を増やす 実施事業者の育成 | 座間味村観光協会 |
| | 海域知識が高いガイドサービス業の提供(海域のサンゴ礁等を守るため) | <ul style="list-style-type: none"> 各マリンレジャー等の団体と連携をとって取り組みを進める | 座間味村漁業協同組合 + 環境省 |
| 持続可能な利用の実現 | 海域の共通ルールの作成、整備をしたい | <ul style="list-style-type: none"> 利用海域の自主ルール草案作り 両協会共通認識の模索、安全担保の確立 草案作成に向けて、検討会を重ね、試行 両協会検討会を経て共通自主ルール確立 HP等に公表し、自主ルールを発信。村外と村内の船舶保持者にも島のローカルルールを告知 | あか・げるまダイビング協会+座間味ダイビング協会 + 環境省 |

| 取組内容 | 2025年度末までの目標 (ゴール) | 2025年度までの取組方策 | 役割分担 |
|------|---|--|------------------------------|
| | | <ul style="list-style-type: none"> ・ マリンレジャー協会と渡船業者などに共通ルールを認識してもらう ・ 1年始動してみて、ルールの見直しや改善点などの洗い出しを適宜行う | |
| | | <ul style="list-style-type: none"> ・ 各団体と連携をとって取り組みを進める ・ 座間味村の認識旗を使用している船だけが、海域を広く使えるルール作りの推進 | 座間味村漁業協同組合 |
| | エコツアーによるアンカリング制限と海のゾーニング | <ul style="list-style-type: none"> ・ 協議会再スタート。具体的な実施方法検討、海のゾーニングについて各団体で案を出す ・ エコツアーリズム推進全体構想見直しを議論 ・ エコツアーリズム推進全体構想の見直し | 座間味ダイビング協会 ＋ 環境省 |
| | (座間味のホエールウォッチングの特徴である) 探鯨システムを継続・充実 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 探鯨員の育成 ・ 自主ルールの徹底とマニュアルの作成 ・ 探鯨員の育成によって船長との信頼関係をよくし、更にクジラと人の良い関係を構築 ・ 探鯨員と船長、ガイドとの信頼関係を深め、良質なツアーを実施 | 座間味村ホエールウォッチング協会 |
| | ザトウクジラの「特定自然観光資源」指定 トナキゾネ周辺の国立公園区域編入 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 「母子サンクチュアリ」や自主ルールなどの一般住民への周知(役場の広報や掲示板に掲載等) ・ エコツアー協議会の再開など議論の場を設定 ・ ザトウクジラの「特定自然観光資源」指定とトナキゾネ周辺の国立公園編入に向けた検討 ・ 渡嘉敷のホエールウォッチング関係者との情報共有や連携の強化 | 座間味村ホエールウォッチング協会 ＋ 環境省 |
| | 座間味村、渡嘉敷村協働で「ホエールスイム禁止」条例化 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 渡嘉敷村と連携するためにもエコツアー協議会の再開 ・ 条例化に向けた検討を継続 | 座間味村ホエールウォッチング協会 |
| | 団体に属さない方への海のルールの周知(海外の方を含む)をしたい | <ul style="list-style-type: none"> ・ 協会でルールの明文化 ・ 他協会と共通ルールのすり合わせ ・ 団体に属さない人たちへのルールの周知・浸透を図る | 座間味ダイビング協会 ＋ 環境省 |
| | (ガイド認定制度を含めた)島内ルールの条例化を検討したい | <ul style="list-style-type: none"> ・ 協会内や他の団体の人と話す場を増やす ・ 会員を増やして協会のルールを周知していく ・ 他団体や行政と連携し、パンフレット(できれば英語も対応)を作成して村内外の人に周知する | 座間味マリンレジャー協会 ＋ 環境省 |
| その他 | 特産品の開発と6次産業化したい | <ul style="list-style-type: none"> ・ サンプルを配り協力者を増やす ・ 畑と畑人の確保、 ・ 農業に興味のある人の他市町村視察 ・ マッチングの促進 | 座間味村農業委員会 |

| 取組内容 | 2025 年度末までの目標 (ゴール) | 2025 年度までの取組方策 | 役割分担 |
|------|------------------------|--|-------------|
| | | <ul style="list-style-type: none"> ・ PDCA の中で出て来る問題解決、付加価値を高めるストーリー作り、小中学生による商品行商、島内消費の仕組み作り ・ 稼ぐを知る、稼げる作物の洗い出し ・ 年収 420 万以上稼ぐ農家づくりを目指す | |
| | 村内行事やイベントを活用した集客をしたい | <ul style="list-style-type: none"> ・ コロナ明け・行事やイベントの通常開催 ・ 人手確保のため、青年会・OBに声掛け ・ 若手実業家を増やすため、島に戻らない理由のリサーチ ・ 村外在住の二代目・三代目へ、島での生活イメージや先行事例を共有 | 座間味村 商工会 |

5. 効果検証

(1) 進捗管理

「4. プロジェクトの実施」に関する各取組の毎年度の進捗状況については、地域協議会及において進捗管理を行う。

各部会においては、各地域の特に重要な取組内容や課題事項について、重点的な議論を行う。

(2) 目標に対する評価検証

1) 「宿泊率の向上」

各年度の両村の船舶予約データを元に宿泊日数を算出し、変化傾向を把握し、改善点等の検証を行う。

2) 「一人あたり消費額の増加」

各年度で実施している「国立公園訪問者アンケート」（環境省実施）における国立公園内消費額のデータを元に、変化傾向を把握し、改善点等の検証を行う。

3) 「満足度向上」

各年度で実施している「国立公園訪問者アンケート」（環境省実施）における満足度データを元に、変化傾向を把握し、改善点等の検証を行う。

4) 「2025年度までの目標」

環境省、渡嘉敷村、座間味村等の関係者が、それぞれの取組内容に対して設定した2025年度末までの目標（ゴール）については、2023年度から3か年の行動計画を作成し、2025年度までの取組の進捗状況や成果を元に、年度ごとに評価し、改善点等の検証、次年度の取組等への反映（行動計画の更新）を行う。